

報道発表資料
平成 21 年 1 月 5 日
気 象 庁

2008 年（平成 20 年）の日本の天候

2008 年（平成 20 年）の日本の天候の特徴：

○年平均気温は全国的に高い

年平均気温平年差は北日本+0.6℃、東日本+0.6℃、西日本+0.5℃、沖縄・奄美+0.4℃で、全国的に高かった。

○年降水量は東日本日本海側、北日本でかなり少ない

東日本日本海側や北日本では、冬（平成 19 年 12 月～平成 20 年 2 月）の降雪量が少なかったこと、春や秋に雨が少なかったことから、年降水量がかなり少なかった。

○年間日照時間は全国的に平年並

全国的に寡照の時期、多照の時期と変動が大きかったが、年を通すと平年並のところが多かった。

○日本海側の降雪量は少ない

2 月前半までは降雪量が少なかったことから、冬の日本海側の降雪量は少なかった。特に北・東日本日本海側ではかなり少なかった。

○各地で局地的な大雨がたびたび発生

6 月には梅雨前線により九州などで、7、8 月には、上空の寒気や湿った気流などにより、各地で局地的な大雨がたびたび発生した。特に、「平成 20 年 8 月末豪雨」により、中国地方から東北地方にかけての広い範囲で家屋の浸水など大きな被害が出た。

○東、西日本では夏季に高温・少雨

梅雨の明けた 7 月には、局地的な大雨はあったものの、東日本、西日本では降水量はかなり少なく、気温もかなり高かった。

○地域差の大きかった梅雨入り、梅雨明け

梅雨入りは、沖縄・奄美と東北地方ではかなり遅く、東日本と西日本ではかなり早かった。梅雨明けは早いところが多かったが、北陸地方と東北南部ではかなり遅かった。

○台風の発生数、接近数、上陸数は平年を下回る

年間の台風発生数は 22 個（平年 26.7 個）、日本への接近数は 9 個（平年 10.8 個）、上陸数は 0 個（平年 2.6 個）といずれも平年を下回った。沖縄・奄美では 6 個の台風が接近し、暴風雨に見舞われた。

※「低い（少ない）」「平年並」「高い（多い）」の階級は、1971～2000 年における 30 年間の観測値をもとに、これらが等しい割合で各階級に振り分けられる（各階級が 10 個ずつになる）ように決めている。また、値が 1971～2000 年の観測値の下位または上位 10%に相当する場合には、「かなり低い（少ない）」「かなり高い（多い）」と表現する。

1 概況

1 月半ばまでは低気圧や高気圧が交互にとおり、天気は数日の周期で変わり、気温も高かったが、1 月後半以降は冬型の気圧配置が現われやすくなり、寒気が入ようになった。北日本から西日本にかけての冬（平成 19 年 12 月～平成 20 年 2 月）の平均気温は平年並であったが、冬前半の気温は平年を上回ることが、後半は平年を下回ることが多いなど寒暖の変動が大きかった。沖縄・奄美でも気温の変動は大きかったが、1 月の高温が顕著であったことから冬の平均気温は高くなった。冬前半を中心に、低気圧や前線が日本付近を数日の周期で通過したことから、全国的に曇りや雨または雪となり、西日本で冬の降水量が多くなったほか、全国的に日照時間が少なかった。低気圧は日本付近を通過した後もあまり発達しなかったことから、冬型の気圧配置とはなりにくく、東日本日本海側、北日本では降水量も少なかった。2 月中・下旬には、冬型の気圧配置にともなって日本海側の地方では降雪量が増えたが、2 月上旬までに降雪が少なかったことから、冬の降雪量は少なかった。

春は、北日本から西日本にかけては、寒気の影響を受けにくく、春の平均気温は高く、北日本、東日本ではかなり高かった。5 月は気温の変動が大きかったが、3 月は移動性高気圧に覆われて晴れる日が多く、高温が顕著であった。本州南岸を東進した低気圧の影響をしばしば受けた東日本太平洋側で春の降水量がかなり多く、低気圧や寒気の影響が小さかった北・東日本日本海側ではかなり少なかった。また、西日本では、移動性高気圧に覆われて晴れた日が多く、西日本太平洋側では春の日照時間がかなり多くなった。

夏の天候は、北日本から西日本にかけて変動が大きかった。東日本と西日本では、6 月には曇りや雨の日が多く、7 月から 8 月前半にかけては晴れて暑い日が多く、降水量も少なかった。北日本では、6 月は晴れの日が多く、7 月には曇りや雨の日が多く、対照的な天候となった。また、気温も、7 月には高温、8 月後半には低温となるなど変動が大きかった。7 月後半から 8 月前半には大気の状態が不安定となって、局地的に大雨となった。8 月終わりには、上空の寒気や、低気圧、前線の影響で、北日本から西日本にかけて、広い範囲で記録的な大雨となり、また、各地で局地的な豪雨となった（「平成 20 年 8 月末豪雨」）。このため、河川のはん濫や家屋の浸水、土砂災害等大きな被害が発生した。沖縄・奄美では、梅雨明け後は高気圧に覆われ、熱帯低気圧の影響も小さかったため、夏の平均気温は高く、夏の降水量は少なかった。

11 月には寒暖の変動が大きかったものの、9 月と 10 月に気温が高かったことから全国的に秋平均気温は高かった。北日本では、高気圧に覆われ晴れる日が多かったため、秋の日照時間が多く、降水量がかなり少なかった。特に北日本太平洋側では、1946 年以降秋としては第 1 位の少雨となった。低気圧や前線は本州の南岸をあまり発達せずに通過することが多く、西日本太平洋側で日照時間が少なく、西日本日本海側と東日本太平洋側では降水量が少なかった。特に、九州では日照時間がかなり少なかった。沖縄・奄美では前線や低気圧、台風の影響を受け、日照時間が少なく、降水量がかなり多かった。特に、9 月中旬の台風第 13 号の接近により、与那国島では日降水量 765.0 ミリを記録するなど記録的な大雨となった。

2 気温、降水量、日照時間等の気候統計値

(1) 平均気温

年平均気温は、全国的に高かった。

(2) 降水量

年降水量は、北日本と東日本日本海側でかなり少なかった。特に北海道では平年の 80%未満

となったところが多く、60%未満となったところもあった。北見枝幸、雄武、帯広（以上、北海道）、むつ（青森県）では、年降水量の最小値を更新した。東日本太平洋側、西日本、沖縄・奄美では平年並だった。

(3) 日照時間

年間日照時間は、東日本日本海側で多かった。一方、北日本太平洋側では少なく、北日本日本海側、東日本太平洋側、西日本、沖縄・奄美では平年並だった。

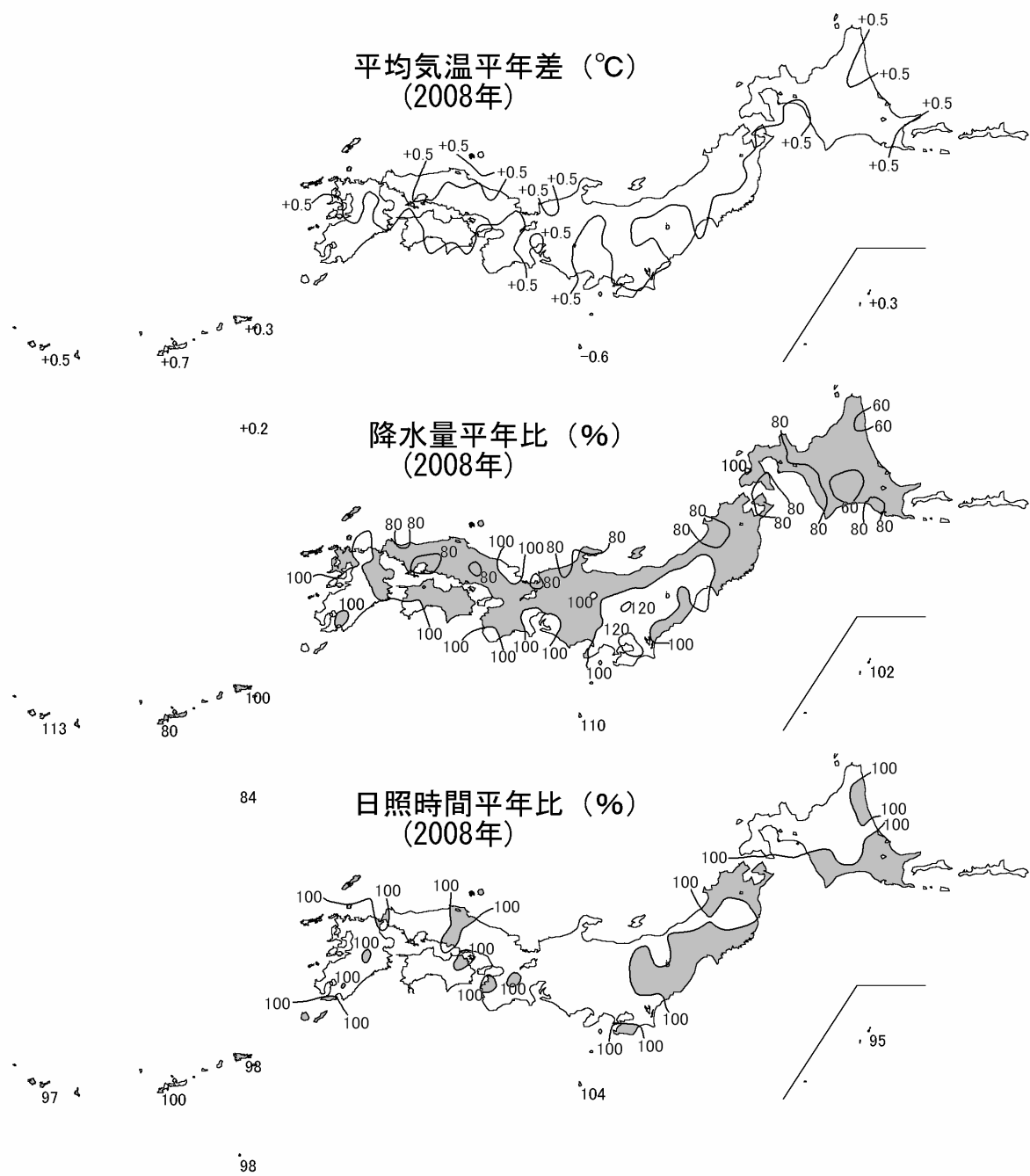
地域平均平年差（比）と階級（2008 年）

	気温 平年差 ℃(階級)	降水量 平年比 %(階級)	日照時間 平年比 %(階級)		気温 平年差 ℃(階級)	降水量 平年比 %(階級)	日照時間 平年比 %(階級)
北日本	0.6 (+)	83 (-)* 日 84 (-)* 太 83 (-)*	99 (○) 日 102 (○) 太 97 (-)	北海道	0.6 (+)	76 (-)* 日 79 (-)* オ 66 (-)* 太 76 (-)*	101 (○) 日 104 (+) オ 99 (○) 太 98 (○)
				東北	0.5 (+)	93 (-) 日 94 (-) 太 93 (-)	97 (-) 日 100 (○) 太 95 (-)
東日本	0.6 (+)	99 (○) 日 84 (-)* 太 103 (○)	103 (+) 日 105 (+) 太 102 (○)	関東甲信	0.5 (+)	108 (+)	102 (○)
				北陸	0.7 (+)	84 (-)*	105 (+)
西日本	0.5 (+)	96 (○) 日 96 (○) 太 96 (○)	102 (+) 日 101 (○) 太 102 (○)	東海	0.6 (+)	97 (○)	103 (+)
				近畿	0.4 (+)	95 (○) 日 98 (○) 太 94 (○)	103 (+) 日 102 (○) 太 103 (+)
				中国	0.6 (+)	86 (-) 陰 91 (-) 陽 79 (-)	101 (○) 陰 100 (○) 陽 102 (○)
				四国	0.5 (+)	99 (○)	102 (○)
				九州北部	0.5 (+)	97 (○)	101 (○)
				九州南部 ・奄美	0.3 (+) 本 0.3 (+)	103 (○) 本 106 (○)	100 (○) 本 100 (○)
沖縄・奄美	0.4 (+)	94 (○)	100 (○)	奄美	0.4 (+)	91 (-)	100 (○)
				沖縄	0.5 (+)*	95 (○)	100 (○)

階級表示 - :低い(少ない) ○:平年並 +:高い(多い) 地域表示 日:日本海側 陰:山陰 本:本土(九州南部)
*はかなり低い(少ない) かなり高い(多い)を表す オ:オホーツク海側 陽:山陽 奄:奄美
太:太平洋側

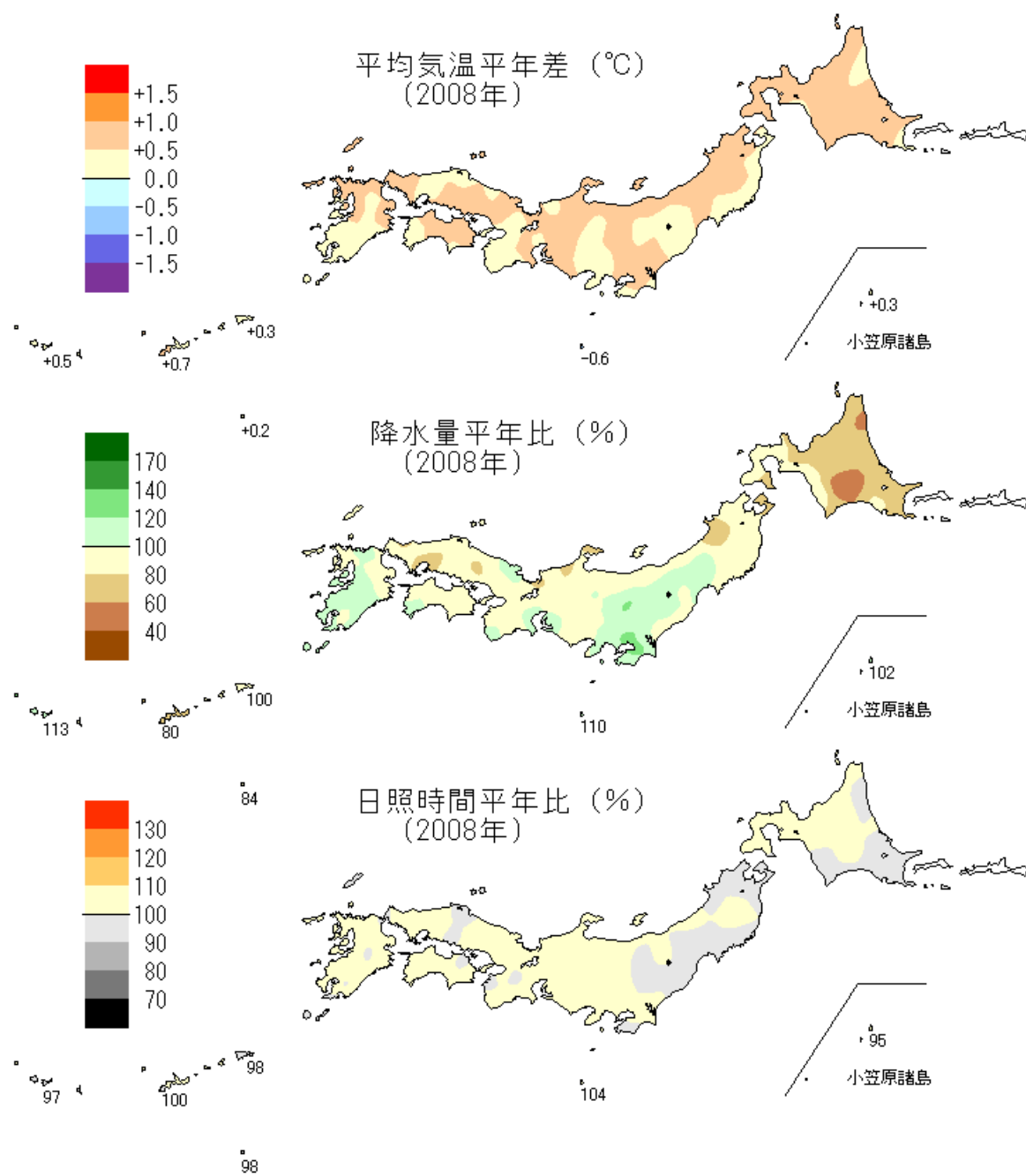
(注)・基礎となるデータは全国の気象台・測候所等での観測値で、観測所数は 153 地点である。このうち、降雪の深さ、最深積雪については、観測を行っている 112 地点が対象である。
・「低い(少ない)」「平年並」「高い(多い)」の階級は、1971～2000 年における 30 年間の観測値をもとに、これらが等しい割合で各階級に振り分けられる(各階級が 10 個ずつになる)ように決めている。また、値が 1971～2000 年の観測値の下位または上位 10%に相当する場合には、「かなり低い(少ない)」「かなり高い(多い)」と表現する。

平年差（比）図（2008 年）（等値線図）

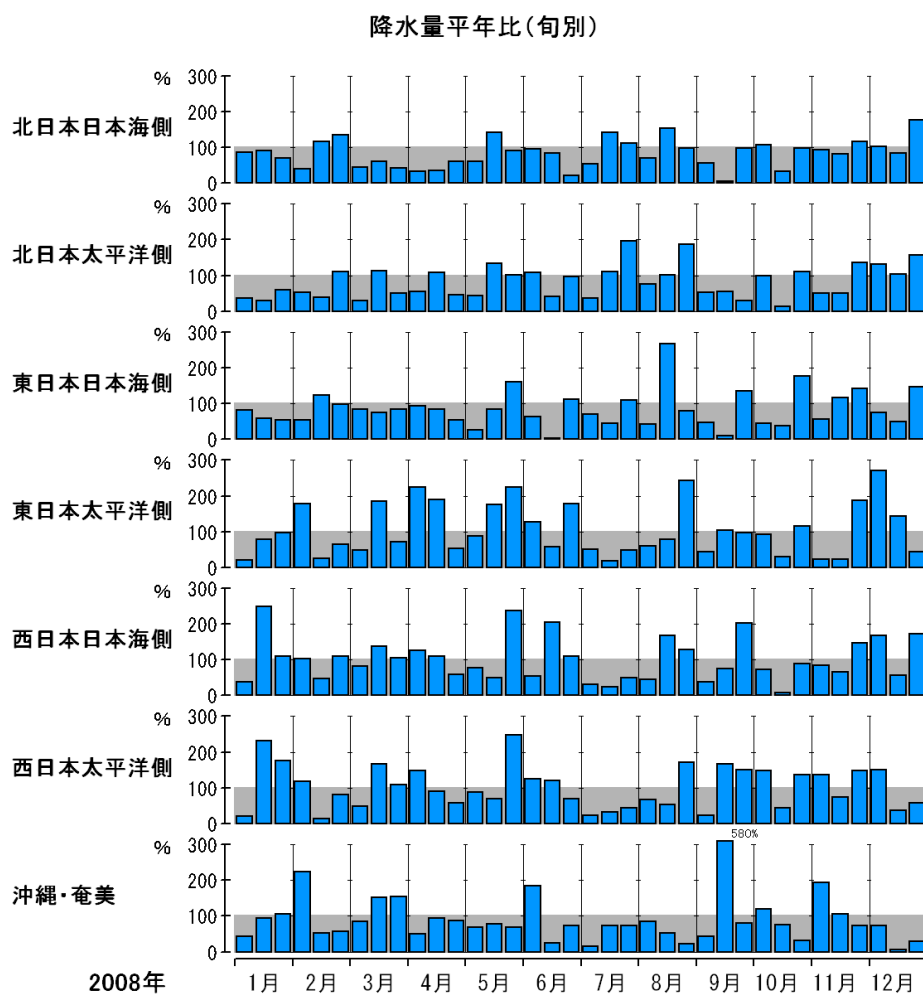
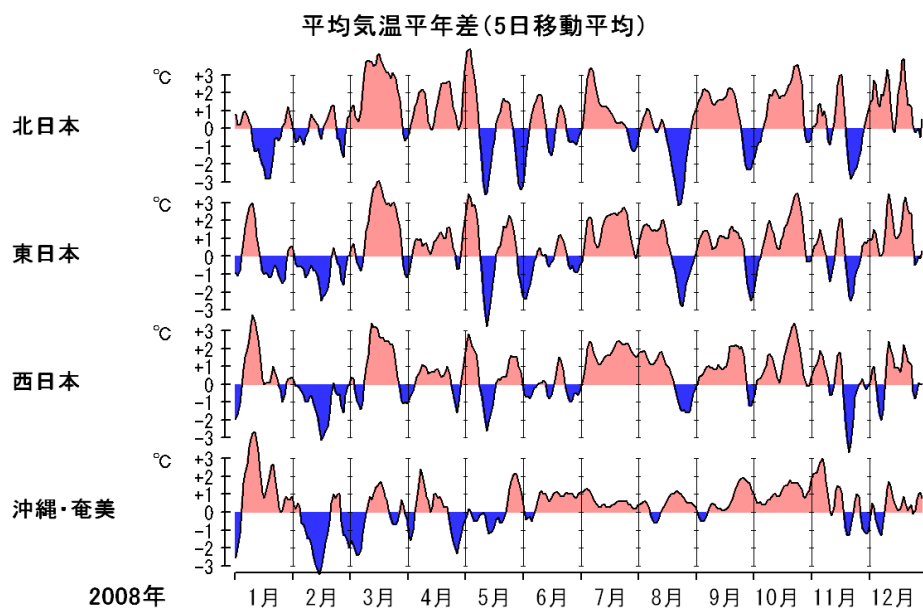


注）陰影の部分は、平年値より低い（少ない）地域を示す。

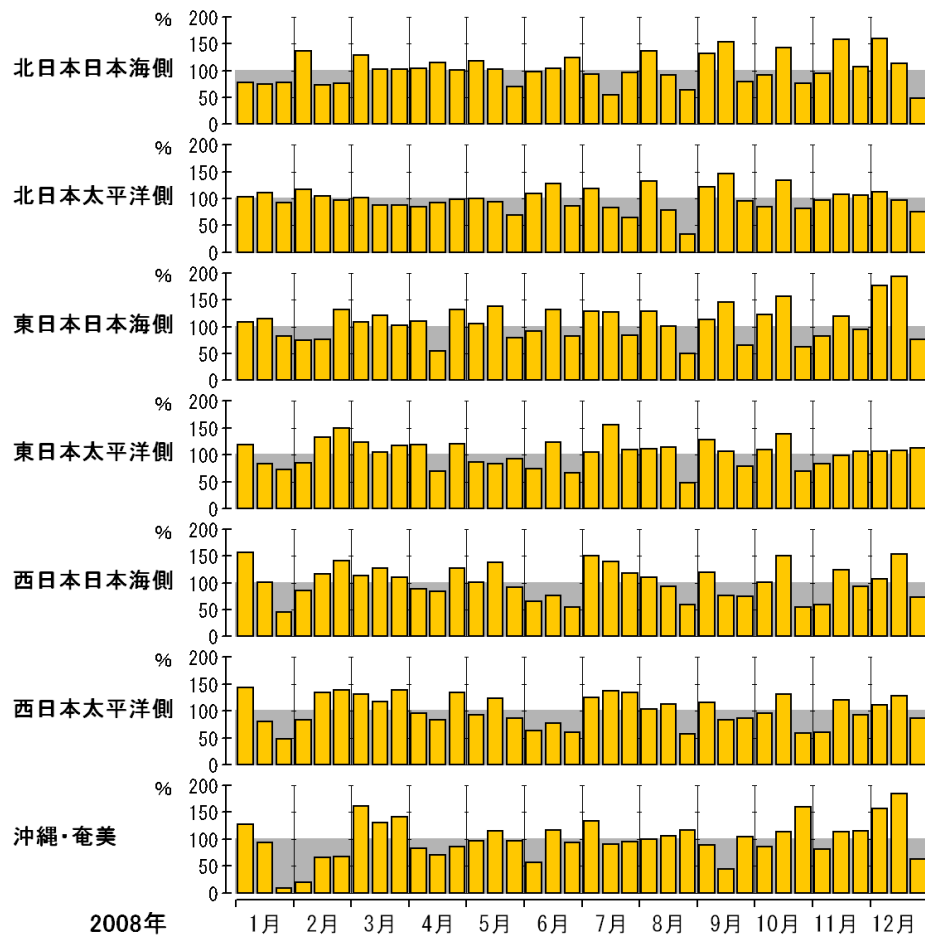
平年差（比）図（2008 年）



地域平均平年差（比）の経過



日照時間平年比(旬別)



観測史上1位の値（月、3か月、年別値）の更新地点数

- ・値は1位を更新した地点数でタイ記録は含めない、タイ記録がある場合には「値タイ」として横に併記した
- ・地域は更新およびタイ記録の地点数の合計が5以上のとき記載した

	平均気温		降水量		日照時間		降雪の深さ	最深積雪
	最高	最低	最大	最小	最大	最小	最大	最大
1月	0	0	0	1	2	1	0	0
2月	0	0	1	1	11 東・西日本	2	1タイ	0
冬	0	0	0	1	1	0	0	
3月	16、4タイ 北・東日本	0	0	3	4	0	0	0
4月	0	0	4	6 北日本	0	0	0	0
5月	0	0	2	0	0	0		
春	1タイ	0	6 東日本	5 北日本	0	0		
6月	0	0	2	2	0	1		
7月	2タイ	0	0	4	0	0		
8月	0	0	0	2	1	0		
夏	0	0	0	1	0	0		
9月	0	0	1	5、1タイ 北日本	0	2		
10月	0	0	0	2	0	0		
11月	0	0	0	0	0	0	1	0
秋	0	0	1	7 北・西日本	0	2		
12月	1、1タイ	0	1	1	4	0	0	0
年 (2008年)	0	0	0	4	0	0	0	0

3 季節別の天候経過

冬（2007 年 12 月～2008 年 2 月）：

- 沖縄・奄美で高温、北・東・西日本では平年並
- 東日本日本海側、北日本で少雨、西日本では多雨
- 全国的に寡照
- 日本海側の降雪量は少ない

1 月半ばまでは低気圧や高気圧が交互にとおり、天気は数日の周期で変わったが、1 月後半から 2 月にかけては冬型の気圧配置が現われやすくなり、寒気が入るようになった。北日本から西日本にかけての冬（平成 19 年 12 月～平成 20 年 2 月）の平均気温は平年並であったが、冬前半の気温は平年を上回ることが、後半は平年を下回ることが多いなど寒暖の変動が大きかった。沖縄・奄美でも気温の変動が大きかったが、1 月の高温が顕著であったことから冬の平均気温は高くなった。

冬前半を中心に、低気圧や前線が日本付近を数日の周期で通過したことから、全国的に曇りや雨または雪となり、西日本で冬の降水量が多くなったほか、全国的に日照時間が少なかった。日本付近を通過した後も低気圧はあまり発達しなかったことから、冬型の気圧配置とはなりにくく、東日本日本海側、北日本では降水量は少なかった。

2 月中・下旬には、冬型の気圧配置にともなって日本海側の地方では降雪量が増えたが、2 月上旬まで降雪量が少なかったことから、冬の降雪量は少なかった。

平均気温は、沖縄・奄美で高かったほかは、全国的に平年並だった。降水量は、北日本日本海側でかなり少なく、北日本太平洋側と東日本日本海側では少なかった。西日本では多く、東日本太平洋側と沖縄・奄美では平年並だった。日照時間は、日本太平洋側と西日本日本海側で平年並のほかは少なかった。日本海側の降雪量は、北日本、東日本でかなり少なく、西日本で少なかった。

春（3～5 月）：

- 北日本から西日本にかけて高温、特に北・東日本で顕著
- 北・東日本日本海側で顕著な少雨、東日本太平洋側では顕著な多雨
- 西日本太平洋側で顕著な多照

北・東日本では、5 月中旬に寒気が南下し気温が低くなったが、その他の時期は寒気の影響を受けにくく、春の平均気温はかなり高くなった。特に、冬型の気圧配置になる日がほとんどなく、移動性高気圧に覆われて晴れる日が多かった 3 月の高温が顕著であった。また、4 月も寒気の南下がほとんどなく、北日本ではかなりの高温となった。北・東日本の春の降水量は、本州南岸を東進した低気圧の影響をしばしば受けた東日本太平洋側でかなり多く、1946 年以降、春としては第 2 位の多雨となった。一方、低気圧や寒気の影響が小さかった北・東日本日本海側ではかなり少なく、北日本日本海側では 1946 年以降、春としては第 2 位の少雨となった。

西日本も寒気の影響を受けにくく、3 か月続けて気温が高くなった。また、移動性高気圧に覆われて晴れた日が多かったため、西日本太平洋側では日照時間がかなり多くなった。

平均気温は、北日本と東日本でかなり高く、西日本で高かった。降水量は、東日本太平洋側でかなり多く、西日本太平洋側で多かった。北日本から東日本にかけての日本海側ではかなり少なく、北日本太平洋側では少なかった。西日本日本海側と沖縄・奄美では平年並だった。日照時間は、西日本太平洋側でかなり多く、東日本から西日本にかけての日本海側で多かった。北日本太平洋側では少なく、その他は平年並だった。

夏（6～8 月）：

- 天候の変動が大きい

○東日本、西日本、沖縄・奄美で高温

○北日本日本海側、西日本太平洋側、沖縄・奄美で少雨

○各地で局地的な大雨がたびたび発生

北日本から西日本にかけては天候の変動が大きかった。東日本と西日本では、梅雨前線が日本列島南岸に停滞したため、6月は曇りや雨の日が多く、7月から8月前半にかけて、東日本と西日本では高気圧に覆われ、晴れて暑い日が多く、降水量も少なかった。このため、四国地方、中国地方を中心にダムの取水制限等の対策がとられた。北日本では6月は高気圧に覆われて晴れの日が多く、7月には低気圧や前線の影響で曇りや雨の日が多かった。また、気温も、7月には高温、8月後半には低温となるなど変動が大きかった。

7月後半から8月前半はときどき大気の状態が不安定となり、局地的に大雨となった。8月終わりには、日本付近に寒気が南下したことや、低気圧、前線の影響で、北日本から西日本にかけて、広い範囲で大雨となり、各地で局地的な豪雨となった（「平成20年8月末豪雨」）。このため、中国地方から東北地方にかけての広い範囲で河川のはん濫や家屋の浸水、土砂災害等大きな被害が発生した。

沖縄・奄美では、梅雨明け後は高気圧に覆われ、熱帯低気圧の影響も小さかったため、夏の平均気温は高く、降水量は少なかった。

台風の発生は7個（平年11.2個）、日本に接近した台風4個（平年6.2個）、うち本土（北海道、本州、四国、九州）への接近は1個（平年3.0個）、沖縄・奄美への接近は2個（平年4.2個）、上陸数は0個（平年1.5個）とそれぞれ平年を下回った。

平均気温は、北日本で平年並だったほかは、高かった。降水量は北日本日本海側、西日本太平洋側、沖縄・奄美で少なかったほかは、平年並だった。日照時間は、北日本太平洋側で少なかったほかは、平年並だった。

秋（9～11月）：

○全国的に高温、特に沖縄・奄美で顕著

○北・東日本で少雨、特に北日本で顕著

○沖縄・奄美で顕著な多雨

11月は寒暖の変動が大きかったものの、9月と10月に気温が高かったことから全国的に秋の平均気温は高かった。特に沖縄・奄美では、1946年以降秋としては第2位タイの高温となった。北日本では、高気圧に覆われ晴れる日が多かったため、秋の日照時間が多く、降水量がかなり少なかった。特に北日本太平洋側では、1946年以降秋としては第1位、北日本日本海側では第3位の少雨となった。低気圧や前線は本州の南岸をあまり発達せずに通過することが多く、西日本太平洋側で日照時間が少なく、西日本日本海側と東日本太平洋側では降水量が少なかった。特に、九州では日照時間がかなり少なかった。

沖縄・奄美では前線や低気圧、台風の影響を受け、秋の日照時間は少なく、降水量はかなり多かった。特に、9月中旬の台風第13号の接近により、与那国島では日降水量765.0ミリを記録するなど記録的な大雨となった。

台風の発生数は平年より少ない9個（平年11.5個）、本土への接近数は2個（平年2.1個）、沖縄・奄美の接近数は2個（平年2.6個）、上陸数は0個（平年1.0個）だった。

平均気温は、全国的に高く、特に沖縄・奄美ではかなり高かった。降水量は、沖縄・奄美ではかなり多く、北日本、東日本では少なく、特に北日本では北海道を中心にかなり少なかった。西日本では平年並だった。日照時間は、北日本と東日本日本海側で多く、特に北日本日本海側でかなり多かった。西日本、沖縄・奄美では少なかった。東日本太平洋側では平年並だった。